



六ヶ所村長  
ふるかわ けんじ  
**古川 健治** さん

昭和9年生まれ。六ヶ所村立尾駮小学校、十和田市立東小学校等の教諭を経て、昭和55年、十和田市立清水小学校教頭。昭和59年、十和田市教育委員会指導主事を経て、昭和61年三沢市立淋代小学校校長。平成10年、六ヶ所村教育委員会教育長を経て平成14年7月より六ヶ所村長に就任。現任2期目。

■青森県六ヶ所村 (人口:約11,000人 面積:253.01km<sup>2</sup>)

下北半島の南東部、太平洋側に位置する六ヶ所村は、イカ・サケ・マス漁などの漁業や、長芋・大根などの畑作野菜栽培が盛んな地域です。また、原子燃料サイクル施設、風力発電施設等を有するエネルギーのまちでもあります。現在はさらに、国際核融合エネルギー研究センターの準備や、液晶関連産業を中心としたFPD(フラット・パネル・ディスプレイ)産業の拠点形成など、国際科学技術都市の確立を目指しています。

■原子力関連施設

ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物埋設センター、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、再処理工場(建設中)、MOX燃料工場(建設中)

事業者名:日本原燃株式会社

■今号の表紙

馬門川中流の滝(青森県六ヶ所村)

トップに  
きく

# 青森県六ヶ所村

## 古川 健治 さん × 新欣樹

(六ヶ所村長)

(電源地域振興センター理事長)

「厳しいながらも豊かな自然溢れる六ヶ所村。誕生から百二十年を迎え、原子燃料サイクル事業を中心に「エネルギーの村」として更なる飛躍を目指す古川六ヶ所村長にお話を伺う。」



村の最北端周辺の海岸には「タタミ岩」と呼ばれる奇岩が広がる。絶好の釣りポイント。



小川原湖。村の最南部に位置する汽水湖。水産資源が豊富で、シジミやシラウオ、ワカサギなどが獲れる。



六ヶ所村は年間を通じて「ヤマセ」が吹き、津軽平野からの西風も吹くため、安定して風力発電を行える。

### 誕生から百二十年 大還暦を迎えた六ヶ所村

新・六ヶ所村は、明治二十二年の町村制施行に伴い六つの集落が集まり誕生したのですが、この六つの集落は名馬の産地で、各集落の名はそれぞれ馬に由来しているとか。

古川村長.. そうなんです。現在の六ヶ所村であるこの地は、古来より名馬の産地として知られており、各集落の名前の由来は、その昔、源頼朝公に「生食(イケツキ)」という名馬を軍馬として提供したことに端を発すると言い伝えられています。その馬の門出たところが「出戸(でこ)」、馬の身丈が鷹待場の架(かほこ)のようだったので「鷹架(たかほこ)」、馬の背中が沼のように平らだったので、「平沼(ひらぬま)」、尾が斑になっているので「尾駮(おぶち)」、さらにその馬に鞍を打ったので「倉内(くらうち)」、馬を鎌倉に引き渡すために泊まったところを「泊(とまり)」と呼ぶようになったようです。

新.. その六つの集落が一つになり村が誕生して、今年で百二十年になる訳ですね。

古川村長.. 人間で言うと、明治の町村制施行より今年で二回目の還暦を迎えることになりました。私は、昨年「未来大開」と言う目標を掲げまし

たが、百二十年を迎える今年はこの「未来大開」に向けて新たに出發する年だと考えています。

そのため、  
・人材を育成し、人を繋げる事業  
・環境を大事にし、自然を繋げる事業  
・心を繋げる事業

これらを、三つの柱として掲げています。その具体的な事業として  
・村内の中学生までの生徒全員に本の寄贈(人材)  
・各自治会での植栽活動の奨励、浄化センターにおける  
百二十本の植樹(環境)  
・村民のシンボルとしての村民憲章碑の作成(心)  
を実施いたしました。

江戸時代、まだ六ヶ所村となる前ですが、この辺りの集落は、貧しい村の代表・代名詞でした。そんな村を支えてきたのは、貧しいながらもまじめに生活してきた祖先の勤勉さに他なりません。この祖先の弛みない努力が次の世代につなげることで百二十年を迎えての私の使命であると考えています。

### 厳しい自然と、六ヶ所の開発 交付金の活用

新・六ヶ所村では、資源エネルギー庁が公募する「次世代エネルギーパーク」について、東北では初めて認められました。

古川村長.. 六ヶ所村では、蓄電池を併用した大規模風力発電、地熱等の新エネルギー施設、石油備蓄基地、原子燃料サイクル施設、国際核融合エネルギー研究センターなどの幅広いエネルギー関連施設を通じて「エ



エネルギーの村「ろっかしよ」を全国に広く発信するとともに、これら科学と自然の共生・協和を考えたまちづくりを打ち出していきたいと考えています。

**新**「科学と自然の共生・協和」とは、素晴らしいお考えだと思います。そう言えば、こちらに向かう際に、大きなガラス張りの温室を見ました。あれは何かの事業ですか。

**古川村長**・あれは、花卉栽培の温室です。花卉栽培としてはアジアで最大級の温室で、六ヶ所村は、冬の気温は厳しいものの、太平洋岸に面しており積雪はそれほど多くないことと、夏が涼しく気温が二十五

度程度までにはならないため、植物にとつて温度管理がしやすいことから、この自然環境の特性を活かした環境に優しい事業として、年間約四百万鉢出荷しています。

**新**自然環境と言えば、六ヶ所村は、夏は「ヤマセ」（北東風）の影響を受けて夏でも肌寒い日があったり、冬は地吹雪が荒れ狂うこともしばしばある非常に厳しい自然環境だと伺っています。

**古川村長**・太平洋から近いこの周辺は、ヤマセの影響をまともに受けます。二十年前ほどまでは、稲に実が入らない「ケガツ」と呼ばれる現象も数年に一度起こっていました。



電源地域振興センター理事長  
あたらし きんじゅ  
**新 欣樹**

昭和18年生まれ。昭和40年、通商産業省入省。科学技術庁長官官房長を経て、中小企業庁長官などを歴任。石油公団理事などを経て日本原子力発電株式会社副社長、平成21年7月より財団法人電源地域振興センター理事長。



文化交流プラザ「スワニー」。国際交流的な機能、原子力に関する国際会議場としての機能、地域住民の文化活動、文化交流、人材育成の機能を担っている。

**新**電源三法交付金事業と言えば、文化交流プラザ「スワニー」もそうですね。

**古川村長**・はい。スワニーは、国際シンポジウムも開催できる施設で、村の文化の核となっています。

## エネルギーのまち 六ヶ所

**新**六ヶ所村は、原子燃料サイクル事業、国際熱核融合研究施設、風力発電など、「エネルギーの村」として、広く知られるようになりましたが、現在に至るまでのご苦労やご努力についてお聞かせ下さい。

**古川村長**・原子燃料サイクルは今の村の発展の基礎となる部分ですが、その「危険性」に対する理解促進を常に図る必要があります。かつては、六つの集落において、原子燃料サイクル事業の賛否をめぐり村を二分するような時期もありましたが、現在



毎年10月に行われる「ろっかしよ産業まつり」で催される「鮭のつかみどり」。海外の方も多数参加する、国際色豊かなイベント。

では、ある程度理解を得られ一つにまとまっていると思います。

I T E R（国際熱核融合実験炉）計画は、本体炉は残念ながらフランスに設置されることとなりました。また、平成二十二年三月に完成いたします国際熱核融合研究施設が、フランスの実験炉とうまく連携して魅力のある研究施設となることを期待しております。

研究施設の建設に伴い、世界中から多くの科学者がいらつしゃいます。その方々にとつても、良い住環境を提供できるよう努めております。そのためには、その方々のお子様たちが安心して教育が受けられる環境が必要と考え、村に「インターナショナルスクール」を受け入れました。現在、六ヶ所村には科学者の子供が七人いらつしゃいますが、た

また、昭和五十年代の半ばに年間通じて道路が通れるようになるまでは、地吹雪のために、半年以上の間、隣の集落に行くこともできず、各集落が孤立するようなどころでした。それから、かつては「半農半漁で冬は出稼ぎ」が村の基幹産業とならざるを得ないほど、厳しい自然状況でした。現在では、稲作に代えて寒冷な気候に強い長芋などの畑作を行うことで、ヤマセがあつても一定の収穫ができるようになりました。

**新**長芋は現在、全国的にも有名な産品になっており、長芋を原料に作った焼酎まであるんですね。いよいよ三年熟成のものがこの秋に初出荷されるとか。

**古川村長**・はい。これも、言わば一種の原燃効果なんです。日本原燃㈱に九州から出向されていた方が、出勤途中に畑に放置されている規格外の長芋を目にして、「もったいない。何とかならないか」と発想したのが始まりです。その後、焼酎のメッカ、九州の酒蔵にお願いし開発されたのですが、開発にあたっては、相当の苦労があつたと聞いております。

ただ、出荷当初は評判が今ひとつで、県内で取り扱ってくれる販売元がなく苦労いたしました。が、三年くらい時間をかけて口コミで広がり、今ではある程度売れるものとなりました。



尾駈(おぶち)沼。白鳥やカモ、オジロワシなどの野鳥が飛来する。周囲には原子燃料サイクル施設が建ち並ぶ。

とえその子供が一人であつたとしても、その子供に対し十分な教育を受けさせてあげたいと思つています。

**新**六ヶ所村は、ドイツのヴァーレンと友好都市であることに加え、原子燃料サイクル事業ではフランスからも多くの科学者が訪れていまして、それに加えてI T E R計画。これらを通じてどんどんと国際化していくことが期待されます。

**古川村長**・設備だけでなく、それが村の文化・学術の向上に繋がるものとなつて欲しいと願つています。

## 次なる還暦に向けて 今後の展望

**新**では、最後に今後の取り組み等について。

**古川村長**・原子燃料サイクル事業については、これはもう、計画通りに操業して欲しいと願うばかりです。



「六趣醸造工房」。ここで造られる長芋焼酎「六趣」は村の新しいシンボルとなった。

平成十八年に完成しました「六趣醸造工房」では、レギュラータイプの「六趣」を年間六万本を生産しており、少しでも多くの方に工房に足を運んでいただきたいという思いから、毎日六十本を同工房で直接販売していますが、ほぼ毎日、完売するという状況です。「六趣」については、その付加価値を高めつつ生産していきけるような販売戦略を打ち出し、村民に喜ばれる村の特産品にしていきたいと思つています。

**新**これは、電源三法交付金事業ですね。

**古川村長**・はい。総事業費約七億一千万円の内、約六億八千万円ほどを交付金で賄つております。

「六趣」は、その特性上六ヶ所での生産が難しい大麦を除き、全てを地元の特産品を用いて製造しており、第一次産業の発展にも繋がります。

また、I T E R計画においては、魅力ある研究を行い、次世代炉に繋がる内容にしていきたい。世界に通用する新たな科学技術の創生。そのためにも、人材育成が重要であると考えています。

六ヶ所村では、第三次六ヶ所村総合振興計画を策定し、村の将来像を「自然が彩る豊かな未来を拓く『躍進・発展のまち』〜人と文化を育み科学と産業がはばたく〜」と定めています。貧しかった時代の祖先の弛みない努力とその勤勉さを忘れることなく、次なる還暦に向けて進んでまいりたいと思つています。

まずは、十一月十八日に行う百二十周年記念行事には、六ヶ所ではじめて完成した「六趣Special」で乾杯したいと思います。

**新**ありがとうございます。



「六ヶ所村制施行120周年記念式典」で式辞を述べる古川村長。式典後の祝賀会では、この日蔵出された「六趣Special」で乾杯が行われた。